

元高校球児から高校野球への応援歌

三浦捷也

(三浦歯科医院 院長)



私がこれまで小学生の野球に対して、頑なにこだわり続けてきたのは「高校野球」への強い思い入れがあったからでもある。私はスポーツ活動の基礎になる小学生のスポーツは「鍛え・競う・勝つ」ことよりも、むしろ自由な遊びを通して「スポーツの楽しさ」「みんなと仲良く助け合うこと」「自分で考え、判断し、自ら行動する力」を育むことの方が大切であるという考えの方が強い。私自身小学生の時代は、近所の友人を誘い、広場を見つけ「三角ベース」に興じ、中学校では全県少年野球大会に挑戦した。高校入学と同時に、何のためらいもなく野球部に入部。当然「甲子園」への夢と期待もなかったわけではないが、当時、高校野球の指導者として高く評価されていた監督のもとで、自分の根幹を築き、大切な高校生活を過ごしたいという願望の方が強かった。

今当時を振り返ると、非科学的な練習も少なくなかった。炎天下、練習中に水を飲むことも認められず、今以上に厳しい練習の日々であったような印象が強い。でも、他人から見れば、ささやかで、不思議に思われることでも、本人にとってすごく大切な瞬間瞬間が高校野球にはある。私には誇れるような球歴は何ひとつないが、高校野球は心のふるさとであり、球友とともに大きな財産である。

戦前、早稲田大学野球部監督で「日本学生野球の父」といわれ、日本の野球指導の第一人者であった飛田穂州氏は、戦後復活した第一回夏の甲子園大会後の概評として朝日新聞に、「学生野球は、あくまでも心の糧として行うべきで

あり、学校教育の一部として、厳たる存在でなければならぬ…」と持説を主張している。以来、高校野球は「教育の一環」「人間形成」を心のよりどころとして発展してきた。今や高校野球の甲子園大会は高校生のスポーツ大会というよりも国民的行事として定着している。マスコミも過剰と思われる程の報道合戦を繰り広げている。甲子園での球児の活躍する姿は多くの人々の心を動かし、感動を与えている。しかしながら、その一方で高校野球は勝利を至上とする考え方が殊のほか強くなり過ぎ、その結果、「健全な育成」「人としての成長」をおろそかにしてしまいがちだ。もとより甲子園大会は高校生の大会である。甲子園大会の「光」の部分だけではなく、感動の裏にある「陰」の部分にもしっかりと目を向ける必要があるだろう。

高校野球、大学野球の「憲法」といえる「日本学生野球憲章」が十数年前に全面改正された。改正後の特徴として、▷学生野球は学校教育の一環であり、アマチュアリズムを基底にする。▷部員の教育を受ける権利を妨げないよう、原則週一回の休養日を設ける。といった内容が盛り込まれた。

憲章見直しのきっかけになった背景には「野球留学」「特待生制度」があった。

数年前、高校野球は私立高校を中心に、中学生の有望選手を有力校に入れる「野球留学」が社会問題に発展し、マスコミを賑わした。野球留学での野球偏重の生活は、生徒たちに特権意識を植え付け、道徳心や規範意識の欠如につながる。高校生にとって教育上好ましくないとい

うのが社会問題になった理由であったように思う。とはいえ、他方、現実には地元を離れ野球留学をし、その後プロ野球などで活躍する選手もみられる。「野球留学」への懸念として将来の有望選手育成を妨げるという意見も聞かれる。いずれにせよ、こうした議論が高校野球はあくまでも「教育の一環」「人間形成」の場であることを再認識する良い機会になってほしいと思っている。憲章改正は高校野球の活動のあり方に一石を投じ、「勝てばいい」「何が何でも甲子園」との風潮に警鐘を鳴らすことになった。

昔も野球偏重の学生たちに批判が高まり、明治の終わりには東京朝日新聞が「野球害毒論」というキャンペーンを張った。昭和初期には当時の文部省が「野球統制令」で学生野球の活動を制限した。そうした時代を経て日本学生野球憲章が生まれ、独立した民間組織として、全国中等学校野球連盟(現・日本高等学校野球連盟)が設立された歴史的背景がある。野球は何度も困難にぶつかり、消滅の危機にさらされながら存続してきた。野球は昔も今も、国民にとって人気スポーツであるが故の弊害なのだろう。

こうした高校野球の現状、背景を心配し、甲子園大会で優勝した監督さんたちが折に触れ、自身の著書やマスコミを通じて、それぞれ高校野球への熱い思いを語っている。

甲子園大会で5回の優勝を誇る横浜高校の渡辺元智監督は「生涯にわたって野球と接点を持ち続ける選手はほんの一部にすぎない。野球だけの人間に終わらせたくない…」と語っている。甲子園で史上6校目となる春夏連覇の偉業を達成した興南高校(沖縄)我喜屋優監督の著書「逆境を生き抜く力」には、勝利を期待する周囲に引きずられることなく、生きるために必要な準備をしようと部員に呼び掛けたエピソードが紹介されている。全国を代表する指導者は一様に、野球の前に人として身に付けなけれ

ばならないことを指導の最優先事項に掲げ、結果を出している点にあらためて注目したい。



思いもよらぬ新型コロナウイルス襲来と、更に新変異株オミクロンが急拡大した。これまでの当たり前が、当たり前でなくなった。今私たちは新たな生活様式が求められている。

高校野球の歴史は100年を超えた。高校野球の積み上げてきた歴史は素晴らしいが、それだけに「高校野球はこうでなければならない」と思い過ぎていないだろうか。「高校野球＝甲子園」というこびりついた考え方を一度洗い直し、継続すべきことと、改革すべきことを明確にすべきではないか。私たちは永遠に野球を続けることはできない。野球のない生活の方がずっと長い。だから、指導者も部員も野球に挑戦してよかったと心から思える高校野球であってほしいと願っている。

「ミスターラグビー」と呼ばれた平尾誠二氏(2016年、53歳で死去)は著書「生きつづける言葉」のなかで、「強いチームの根幹をなすのは、強い『個』である。個を個として自立させ、その能力を最大限に引き上げなければ、強い組織をつくれぬ。組織を強くするためには、まず個を強くすることだ」と語っている。正に至言である。高校野球を体験した元球児として、なるほどと納得できる教えでもある。試合をする以上、勝利を目指すのは当然だ。だが、相手に勝つ以上に自分に克つ。それに徹底してこそ、本来の目的が達せられる。

新学期を迎え、それぞれの部員にとって夏への熱い挑戦がスタートする。同じ苦労やつらさを共有した友と甲子園を目指したことは実社会で自ずと役に立つ。だから、高校野球に打ち込む意義がある。自分を信じ、仲間を生かし、悔いの残らぬ力戦奮闘を期待する。

元高校球児から高校野球への応援歌である。